

研究のための環境がなかなか整わない中、1949年の国立遺伝学研究所（遺伝研）開設当初に着任した研究員8人のうち2人は早々に大学に転出した。研究員の一人だった木村資生も、着任後初めての夏には京都の出身研究室に逃げ帰ったまま滞在が延び延びになり、手紙で呼び戻されたという。

この木村が、今日でも遺伝研の代表的な研究成果といえる「分子進化の中立説」を英科学誌「ネイチャー」に発表したのは、遺伝研設立から約20年後の68年だっ

データの処理が課題に



た。遺伝学と数学とを組み合わせた「集団遺伝学」という分野から生まれた理論である。

20世紀の生物学は、周辺分野を取り込むことで爆発的に進展した。50年代から

60年代にかけて、「生物物理学」や「分子生物学」と呼ばれる融合的な分野が生まれ育った。さまざまな遺伝子についての記述が進む

と、今度は膨大なデータの処理が問題となった。

DNAデータベ
ースの黎明期だっ
た80年代には、生
物学と情報科学の
両方に精通した研
究者はほとんどい
なかった。当時の
生物学界隈で計算
機をよく使ってい
た人たちは、すなわ

電子計算機で数値
計算する集団遺伝
学者たち198
2年ごろ

ち生物物理学者と集団遺伝学者が頼りにされた。

木村の学術界での名声も確立した80年代初頭、世界の大学や研究機関で解読されるDNAデータの量は増えつつあり、ヒトゲノム計画も現実味を帯びてきた。

日本国内でも公共のDNAデータベースが必要であるという論調が強まり、分子生物学会や生物物理学会で活発に議論されるようになった。

しかし欧米ではそれぞれデータベースが軌道に乗った一方で、日本の出足は鈍かった。日本を動かしたのは、欧米からの「外圧」だった。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）